【ゲーム領域（低・中）授業研究会】
参加者：米子市１２名
オブザーバー：鳥取県小学校体育研究会
長谷川　誠一　顧問

○協議の柱
「わたしたちの体育」の活用の意図と成果及び課題はどのようか。
易しいゲーム（簡易ゲーム）が，児童の主体的な学び（課題の焦点化，コツの習得，ポイントの体現化）に繋がる場になっていたか。
「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方の授業者の意図が感じられる授業展開であったか。

○成果
・新聞紙ボールは教具としてとてもよかった。
⇒柔らかく，足で止めやすいので，体をボールに近づけるだけで足元に収めることができていた。
⇒低学年から段階的に取り入れていくことで，中学年ではゴムボールの使用も容易になると考える。
・児童がパスを通して得点を奪うという目的を明確にもち，チームで作戦を立てながら活動に取り組む姿がよかった。
・活動の中間で，事前に考えた作戦について話し合い，後半の活動に生かす場面で，児童が積極的に意見し，修正する場面に見方・考え方を働かせる姿が見えてよかった。

○課題
・「わたしたちの体育」のグリッドゲームはドリブルで通り抜けることを想定している。パスの技能を意識するのであれば，グリッドをもう少し広くし，パスの受け手が大きく動けるようにすればよかったのではないか。
・守備側グリッドを，2 回パスを通して得点を競っていたが，止められた場合最初に戻るルールだったので，最初の児童が蹴る場面が多かった。多くの児童に機会を設けるためには，ローテーションしてもよかったのではないか。
・運動の価値をグリッドゲームではなく，サッカーの特性から見出して授業を構成していく必要があるのではないか。パスをつなぐための作戦ではなく，その先のゴールを奪うための作戦を立てることで，パスが手段となるのではないか。
⇒易しいゲーム（簡易ゲーム）が主活動ではなく，課題の焦点化，コツの習得などの方法と捉える必要があると考える。
⇒本時の流れでグリッドの最後にゴール，もしくは段ボールなどの的があり，入れたりぶつけたりしたらサッカーの特性に近づけるのではないか。
・児童に審判をさせる場面を設定することでルールを〈知る〉，ゲームを〈みる〉力をつけられるのではないか。また，作戦の多様性にもつながるのではないか。
・守備側は，交代でグリッドに入っていたので外から見る視点を与えるとよかったのではないか。
・ふりかえり板の活用として，中間に１回設けることで，１時間（４５分）の中でも〈支える〉視点が明確になるのではないか。
・集団としての「する・みる・支える・知る」だけでなく，児童一人一人の中にも「する・みる・支える・知る」があり，それぞれの相乗効果でめざす姿につながっていく。研究の視点になるのではないか。